

氏名	楊朝暉
学位の種類	博士(芸術)
学位記番号	甲博制第37号
学位授与の日付	平成26年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	写真と自己表現
作品テーマ	「DREAM」
論文題目	「写真における自己表現」

論文審査委員	主査 客員教授	有野永霧
	副査 教授	織作峰子
	副査 名誉教授	田中敏雄
	副査 教授	山縣 熙

内容の要旨

この論文は、「写真とは何か」という根源的な課題と向き合いながら、写真における自己表現とは何か、自己表現はどこまで可能であるか、を探求することを目的としている。その上での作者は、都会を徘徊し、リフレクションを利用しながら制作した申請写真作品が自己表現として成り立つことの根拠を考察している。

序文において、申請者・楊朝暉は、カメラによる「外在の描写」と作家の「内在の表出」とを対比させながら、170年余りの写真史を振り返り、写真における「再現」と「表現」の意味と異同を問うことから始め、最後は自作における自己表現の成就を持って終わりとする。

第1章 写真と写真的な自己表現の章では、「写真とは何か」という根源的な問いと、写真行為と自己表現について考察している。

- 1.1 「写真とは何か」では、写真は記憶・記録の手段で、装置による画像で、情報を伝達するためのメディアであり、その結果記録性と表現性を併せもつ造形芸術である。人間の信念、思想、感情の表現は記録性と対立するものでなく、それが写真の特有の表現性であるとする。
- 1.2 写真独自の芸術が発展してきた歴史を振り返りえる。写真は様々な芸術主義や芸術運

動と交流しながら、作者の内面や精神世界を表現することが可能な表現方法でもあることを検証する。

第2章 「写真を撮る」という行為にみられる自己表現の可能性を、先人の作家を例示しながら語っている。

- 2.1 被写体の演出では、ロバート・メイプルソープのセルフ・ポートレイトを例示して、生と死に始まって絶望感、疎外感、孤独感など創作者の心理面の映像表現を研究しながら、自己表現の可能性を広げる。
- 2.2 写真装置の操作では、佐藤時啓の心の中に浮かびあがる心象風景の作品を取り上げ、言葉と同じようなメッセージや説明や意味を伝えることができることを例証している。さらに日本写真界に大きな影響を及ぼした『プロヴォーク』を例にとり、幅の広い内面描写がなされた事実を述べることによって、自己表現の根拠としている。

第3章 「写真を創る」という行為の過程によって創作される自己表現を考察している。

- 3.1 画像加工では、性的イメージを武器として身体論的写真作品を創作した細江英公を取り上げ、作品は表現者が考えること、表現者の真の姿、表現者の内面を語る主観的なメッセージであるとし、写真自己表現の奥深さを語っている。
- 3.2 イメージの創造では、ラースロー・モホリ＝ナギと新興写真の作品を取り上げ、作者のイメージの創造性について考えながら、創作による自己表現の分野にまで探究を広げ、さらに論を深く掘り下げている。

第4章 「内在」からのメッセージでは、これまでの論考をもとに、申請者の作品『ドリーム』の制作意図と表現目的を解説している。

- 4.1 『ドリーム』の形式では、作品の形態を述べる。特色の一つは、モノクロ作品であること。モノクロ写真は、ものの形を鮮明に浮かび上がらせ、被写体の形状を強調し、その動きを永遠に閉じ込め、その中に「別の物」が表現できる。そして、色彩に惑わされず、余分なものを削ぎ落とし、形や光や影だけで被写体を表現する結果、被写体の本質と表現者のメッセージを強く伝える力があると指摘する。その上で自作をモノクロ写真で制作している根拠を明らかにする。撮影場所には、多様な視覚体験ができる都市を選び、ショーウィンドーに映るリフレクションを活用しながら、現実の世界の中に夢の世界を発見し、夢という心象を映像化しようとした意図を語っている。
- 4.2 『ドリーム』の内容に関しては、夢判断として一般的に解釈される研究を参考にしながら、夢の中に現れる自己の孤立感、寂寥感、不安感、欲望さらには希望など、作者自身の内面の世界を作品に塗り込めようとした意図を明らかにしている。

日本語を母国語としない申請者の文章は、時に、読み手に違和感を与えたが、それとても、わずかな部分であり、申請論文としては出色のできであり、審査員全員、論文を合格することに全く異議はない。

作品について

申請者は、人の欲望を呼び起こす仕掛けに取り巻かれた都市空間に迷い込んで生活を送っている。日々翻弄されながら、溺れ、のたうちまわる自分の中に見つめ続けたイメージを、夢という写真の世界に塗り込んでいくことにより、自己の居場所を探ろうとしている。そこに作家的姿が立ち現れている。

具体的には被写体として、ガラスに映るリフレクションを活用したことが、作者の趣旨に合い、見えるようで見えない夢のイメージを感じさせることに成功している。

ハイコントラストによって、腹の底から絞りだすような感情表現が現出している。研究によって生み出した暗くどんよりした独特のモノトーン表現、焼け焦げたようなプリント表現によって、苦悩の中にも明日を信じようとする作者の複雑な心理を塗り込めることで、作品として完成させている。

制作担当の副査・織作は、留学生としての不安や悩みを抱えながら学部大学生、そして大学院生として制作を続ける中で、対人的にもまた被写体に対しても、常に距離をおき、時には作家自身と被写体との間に何らかの物体をいれ、その物体(例えば金網や柵)越しに被写体を眺めるという行為が、申請者には一貫としてあった。距離を縮めても縮まらない心の葛藤を作品にぶつけ表現したのが、今回の研究題目である『DREAM』であるといえよう。被写体を選んだ理由、作品に写りこんだ小道具たちから、心理状況を紐解き、自身の中に内在する感覚を正直に表そうとしている、とコメントしている。

副査・田中も、ショーウィンドーを通した都市の姿に自己の内面(在)の世界を表現しようと試みた手法に申請者の意図(DREAM)が理解でき、新鮮さを感じた。ショーウィンドーを通して、また都市の複雑な光景を通して自己の内面の世界を表現しようとした作品も評価に値するとしている。そうした試みこそが、論文において申請者が述べている、「写真作品における自己表現」の現実化である。

展示方法にもオリジナリティが感じられた。1点1点を独立させながら立体的に流れる展示方法は、ユニークであり深い鑑賞を誘導していた。審査に参加してくれていた環境デザイン学科教授からも「作品の世界に十分入っていた」との発言があった。まさに申請者のいう「撮る」「作る」「見せる」の三位一体を表現している。

最後に、副査・織作は、これからも作家自身の持つ心の悩みや不安を写真作品にしなが、どのように解決して行くのか楽しみであると述べている。主査・有野も、誠実な生き方をし、才能と可能性のあるこの申請者の今後の活躍を信じるものである。

結論として、審査員全員が論文・作品共に博士（芸術）の学位申請論文に十分値するものと認定し、合格とする。